



Title	シュテファン・ゲオルゲ研究 : 伝記(1)
Author(s)	八木, 浩
Citation	大阪外国語大学学報. 1959, 7, p. 39-67
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80151
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Stefan George — Sein Leben (1)

YAGI Hiroschi

U M R I S S

Dem Dichter Stefan George war immer die Art von Wissenschaft verhaßt, die das Leben des Dichters ohne das Werk willkürlich zuergreifen sucht. Aber diejenigen Kritiker handeln nicht richtig, die über das Werk des Dichters ohne Kenntnis seines Lebens urteilen. Sie mißverstehen die Werke des Dichters. Sie sehen willkürlich die Werke des Dichters zum Beispiel nur von dem Zeitpunkt aus, da man sich vorübergehend den Ideen des Imperialismus und Sozialismus widmet. Solche Missverständnisse, wie sie ästhetische oder sozialistische Kritiker bisweilen machen und welche selbst in Japan gemacht werden, können vermieden werden, wenn wir das Leben des Dichters studieren und auf diese Weise unangängige Ansichten eliminieren. Den Dichter, der das Biographische nicht so wichtig nahm, müssen wir gerade heute, da viele in willkürlicher Weise den Dichter sehen, in biographischer Hinsicht nicht außen acht lassen. Je mehr man seine Werke liest, desto notwendiger wird es, sein Leben so intim nachzuerleben, daß man es im Werke in gewisser Beziehung gestaltet und verkörpert erkennt. Um den ganzen Dichter kennen zu lernen, ist es nicht genug, die Werke des Dichters und über dieselben zu studieren. Wir lesen wiederholt seine Werke, aber wir möchten noch besser sie verstehen lernen, indem wir die Zwischenzeit zweier nacheinander geborener Werke erkennen und verstehen lernen. Wir könnten noch produktiver sein, wenn wir nacherleben könnten, wie der Dichter die Zwischenzeit gelebt hat. Die Zeit zwischen den „Hymnen“ und „das Jahr der Seele“ zu erfassen, ist uns zum Beispiel, ebenso wichtig, wie diese zwei Werke selbst zu analysieren. Wir können dadurch viele Dichter und Freunde kennen lernen, die auf den Dichter Einfluß ausgeübt oder die vom Dichter Einfluß empfangen haben. Sie zu studieren, ist sehr wichtig. Wir können dadurch den Dichter aus seinem Umkreis und seinen Beziehungen ruhiger und objektiver verstehen und urteilen lernen.

Die Materie einer Biographie kann man nicht aus der Luft greifen. Unter vielen anderen, die ich am Ende der letzten Abhandlungen angeführt, danke ich die meiste Materie Robert Boeringer und danach, den späten George betreffend, Edgar Salin. Vor kurzem habe ich „Stefan George und die Weltliteratur“ von Edward Jaime (1949) zur Hand bekommen und auch diesem Buche verdanke ich ziemlich viel. Jaime

schreibt: „In den Literaturen aller Völker wechseln immer wieder zwei Grundrichtungen einander ab. Sie heißen nicht Klassizismus und Romantik — das sind Begriffe, die sich überschneiden — sie heißen einfach *Abschilderungen der Wirklichkeit* und *Ausdeutung ihres Wesens*.” Dieser Auffassung zufolge war George Ausdeuter des Wesens der Wirklichkeit. Man könnte ihn den französischen Symbolisten zur Seite gestellt denken. Als deutscher Dichter war er durchaus mit dem Wesen der Wirklichkeit befasst: das wird aus seinem Leben klar. Dies Ebengesagte deutlich zu machen habe ich hier in acht Kapiteln das Leben des jungen George behandelt. 1) Herkunft, Kindheit und Schulzeit. 2) Jugend; Reise durch England, Schweiz und Italien; Paris und Begegnung mit Mallarmé; Reise nach Spanien. 3) Berlin, Wien, Belgien; Ringen um die Sprache und das erste Werk; Begründung der „Blätter für die Kunst.” 4) Verhältnis mit Ida Coblenz 5) Begegnung mit Hofmannsthal und Verlauf des Briefwechsels. 6) Urteile über die Freundschaft zwischen George und Hofmannsthal von Seiten mehrerer Wissenschaftler. 7) Das Wahre in den Werken und im Kreis des jungen George. 8) Freundschaft, Kritik und Gegenbewegung der vielen älteren Freunde... Eine Betrachtung des weiteren Lebens George soll nachfolgen.

人よ記憶せよ

汝は塵にして塵に帰るもの—ゲオルゲの墓碑銘—

シュテファン・ゲオルゲの先祖のヨーハン Johann George (～1778) はロートリンゲンの人で、ニート川 (Nied) に臨むボルヘン (Borchen) 近郊のルーペルディング (Ruperding) に住む織工であったが、収税吏であったその子のヨーハン・バプティスト Johann Baptist George (1772～1853) は1804年にそこからビューデスハイム (Büdesheim) に移住した。その甥のエティエンヌ (Stephan Etienne George (1806～1883) はビューデスハイム市長になったり、国会議員になったりして活躍した。その弟アントン Anton George (1808～1881) が詩人の祖父にあたる。この祖父は旅館 (Gasthaus zur Traube) を営み、またぶどう酒商人だった。彼はフランスの市民権を持っていて (Curtius), 軍役に服し、七月革命の折は叛乱軍に対抗して勇敢に戦った。彼はビューデスハイムに移住後も尚フランスに深い共感と愛著を持ち、館の前のベンチに坐り、詩人に戦争の思い出やフランスの話をしてきかせ、幼い時からフランスに対する愛情を植えつけた。詩人は13才の時祖父を失った。祖父は日常にもフランス語を使うことが多く、そのならわしは詩人の両親のみならず、詩人にも伝わった。詩人の父シュテファン Stefan George (1841～1907) は1865年にその地方の農民の出である エーヴァ・シュミット Eva Schmitt (1841～1913) と結婚、家業をついだが、1873年にビンゲンに移住している。彼はそこでぶどう酒商を営み続け、その方面の委員に選ばれたり、市会議員になったり、いろいろ公共的にも奉仕した。詩人のシュテファンは彼とエーヴァとの間に、1868年7月12日にビューデスハイムで生まれ、5

才でビンゲンに移住した。ゲオルゲの先祖がユダヤ人だったとか、大金持だったとかいうのは、ゲオルゲの友達に不思議なほどユダヤ人が多かったことからできた作りごとである。またフランス系の家系だという説も同様に根拠がないが、こういう問題をおこしやすいこの家系には、詩人の心にいつまでも残っている古代ローマの遺産への敬意やドイツとフランスの対立に対する深い心配について、確かに説明してくれる地理的な説得力がある。君たちと同じ民族だ (Moi, je suis de la même race que vous!) と彼はフランス人に言ったし、また「フランケン」という詩では仏独を一つと見なし、カロリング王朝時代の統一体のみを政治的現実として渴望している。しかしゲオルゲのフランスに対する親近性を、祖父の影響や地理的事情以上に深入りして探究することは危険である。

ゲオルゲの父は、ライン地方にみられる明るい性格の人で、若い時は音楽や詩が好きだったがのちには全く生活に打ち込み、しかも名誉欲なく、静かな心で安住していた。彼にはフランス人のような印象や、享樂的でバツカス的なところがあった。彼は教育の面では子供に完全な自由を与え、詩人はそれを感謝して受けとった。一度はリヒャルト・デーメルに街頭であい、息子の詩がどんなものかを尋ね、「私のぶどう酒を売ってくれたらよいのですが」といったこともあったが、一度も息子の道を抑えたことはなかった。この父親と比べると母の方は対照的で、黙り勝ちで宗教的な深さを好み、また名誉心を愛し、交際は狭く、家族とも隔たり勝ちで、子供に接吻したこともなかったといわれる。彼女とつきあうのはむつかしく、病気になっても世話しにくかった。彼女は読書に耽るほどではなかったが、絵を時に好み、また植物に詳しく、詩人にこの方面の知識を与えた。父と母の性格は開放的と閉鎖的、快活と厳格という風にくい違っている。ジャイメは、詩人が父の産物である、なぜなら母は詩人の特色について予感すら持たなかったからとのべているが、逆に、詩人は恐らく母からある決定的な性格を受けついたのでというベーリンゲルの考えもうなづける。彼の厳しい芸術観、閉ざされた交友法は確かに母の血を受けついたのでといえるだろう。だが詩人の姉アンナ・マリア・オットーリエ・ゲオルゲ Anna Maria Ottilie George (1866~1938) はもっと多くを母から受け、品位を守り、宗教に心身を打ち込み、厳しい生活を保持し、母の死後もずっと独身であった。詩人はこの姉と生涯親しんでいた。それは往復書簡からもうかがえるし、詩集「心の年」が捧げられたことからわかる。詩人の弟のフリードリヒ・ヨーハン・バプティスト Friedrich Johann Baptist George (1870~1925) は父の業をついだが、同じく独身であって、詩人も同じく独身であったから、ゲオルゲ一家は詩人をもって血統が途絶えたのである。

詩人の家はいつも部屋をあけて詩人を待っていた。それは死の日まで変らなかつた。永遠の巡礼者であって、「いつでも一介の訪問者といえる私のような者は」(Wer wie ich, überall gleich-

sam nur Besucher ist) とホーフマンスタールにあてて書いている通り、絶えない遍歴に終わった詩人だが、その活動の中心点をしいて求めるとすればやはりこの家であった。詩人の生涯は平坦で、同じリズムで進んだが、そのためにはこの家が、最も大切な役目を果たしたはづなのである。だが彼はこの家に決して愛著を持ってはいなかった。ピンゲンの町に対してもそうだった。畏敬の情が許さぬからといって、売ることを控えたといわれるこの家も、1944年の空襲で見る影もない。彼は故郷に閉じこもって落ちつくことを嫌い、広い世界を求めて転々とした。郷土文学とかオーストリー文学とか国民文学とかいうものに彼ほどさからった詩人はいない。彼の文学は根本的に世界文学的なものであったが、それはダンテの生涯にも似た、国から国へ、町から町への生涯に基礎を持っていたといえよう。だが詩人は故郷を愛さなかったのではない。幼年時代の最初の大きな体験といえばカトリック的な教養とふるさとの風景だった。「子供のこよみ」(Der kindliche Kalender) という散文詩は若い心がどんなに深く教会とつながっているかを語っている。ライン川とナーエ川が形成する一角、背後にはゲーテが紀行文でしるしている聖ロフス山とその寺院が控え、ぶどうが森にとって代り南国を思わせるところ、そこでは太陽が一段と輝きを増し、誇らしげに英雄を思わせて水が轟き、一切の根源がそこにあるのだ。彼の詩はくり返しくり返しそれを歌っている：

日に踊る野辺に幸いあれ！
神聖なぶどうが勝って
森は切られ野獣は退き
冠を着てパンがへーべと現れた！
粗野な狩人も毛むじらな犬も
その白い大理石の足を避ける。
広間は招く、南国さながらに……
今もわれらは光を楽しむ。
掘り返された穴からは
軍勢とそれらをとрмаく
女や子供の氣息が煙り
ここに彼らの金と鉄と冠がある！
山道には 見よ あの一群
足踏み進む歩兵隊！
シーザーの子の鷲の旗に
橋も門も開かれてなびく。

これら廢墟の上に教会がそびえて……

しかしもっと大切な根源 (Ursprung) は詩人の力についての確信である：

だが葦の宮殿の立つ流れのほとりに

快樂の崇高なうしおに駆られ、

誰もわからない歌となって

われらは万有に支配し命令した。

アッチカのコーラスの甘さと烈しさで

丘の上に島の上に歌がひびいた：

CO BESOSO PASOJE PTOROS

CO ES ON HAMA PASOJE BOAÑ

ゲオルゲはこのような謎の言葉で Ursprung という詩を閉ぢている。彼の遺稿にはオデュッセー第一歌をこれで訳したものがあつた。詩人の遺言によって、またこの謎が謎として止まるようにという人々の考えによって、友人がこれを焼却したそうだ。この二行からみてもこれは南方的な、母音に富んだもので、ドイツ語に対する不満を秘めている。詩人は幼い時から言葉の独創を夢見、それが一度は実を結んで、青年時代にはこれで詩を書き続けるに至るのである。勿論二度とこの試みはその後とりあげられず、それらの作品もドイツ語に訳されてしまったが、このため詩人のドイツ語に対する愛情が倍加したといえよう。こうしてゲオルゲの創造精神は幼年、青年、成年を通じて、言葉を根本からやり直そうとしている。友人の思い出によると、詩人は子供の時、「王と大臣」(König und Minister) という遊びを案出し、四週間後交替する約束で王になったが、どうしても王の役から退かなかつたので、この遊びはとりやめになつたそうだ。彼は先述の詩でこう歌っている：

青春の夢におけるほど

世界が強いられ 一精神に

滲透されたためしはない。

ゲオルゲは子供の時から持続的で一精神に熱中する天才であつた。この天才がライン川の流れのひびきから自分のひびきを鍛えてくるには、言葉でいえない多くの体験があつたであろう。だがわれわれは余りにも少ししか詩人の生涯について知らないのである。

彼はビンゲンの実科学技 (Binger Realschule) を出て、ダルムシュタットのギムナジウム (Ludwig-Georgs-Gymnasium) に入った。13才の彼はやせ気味で、背は高く、濃いふさふさしたブロンドの髪、突出た下あご、明るく青く輝く目をもっていた。彼はここで1882年から1888年まで学んだ。特に彼はフランス語ができて、言葉をうまく選び出して使う能力に冴え、既にフ

イロログ的才にたけていた。喧嘩なども元気にやったし、特にカルタの裏を見ることを絶対許さなかったことが友達の記憶に残っている。1886年ごろには詩作がある。全集の「習作」に収められているものは、すでに若々しくて美しくゲオルゲらしい緊張感をそなえているので、それ以後の習作とともに別に研究の対象とする必要がある。そのほか詩人はノルウェー語を学んでイブセンを訳そうとし、イタリー語を学んでペトラルカとタッソーを読もうとした。その痕跡は——そのほかスペイン語の訳詩をも含めて——習作集の中に伺われる。この時代にゲーテやヘルダーリンは彼に読まれたであろうが、シラーとハイネは余り読まれなかったと思われる。ニーチェをも読んだそうだが、思想家としてでなく、美と芸術への刺戟者としてであろう。彼は若干の友を集めて雑誌（Rosen und Disteln）を出したが、その序文はのちの Blätter für die Kunst（芸術草紙）を思わせるものがある。ただそれは大づかみで、ずっと粗雑にこう言っている：「今日発足する雑誌の目的はその標題が既に語っている。それは宗教や政治の内容を厳しくしめ出し、芸術の諸形式で読者を楽しませようとするものである。」しかし形式という問題ととりくむ点では、この17,8才の頃の習作はまだ重要ではない。注目すべき作品としてはのちにグンドルフがプランを引きついだ悲劇（Phraortes）や、全集補巻にある劇作マニュエルの初稿がある。こうして詩人はドラマと詩の習作にはげみ、成績はよい方ではなかった。1888年3月に卒業した。

その年の5月に、父の商用を兼ねたのではないかと思われるが、ロンドンに出発し、そこで10月まで滞在し、それから彼はスイスにいった。そのころの作品が Von einer Reise（ある旅より）である。詩句は次第に成熟の度を強め、いつも鍛えようとする意志が働き始める。希望が明るく胸の片隅にともされる：

鉄とかなしきのかみあう音が
眠りを破っても許してやろう。
鍛冶屋はもう暗い昔を思わせない、
彼は鍛え、祝福し、解放する。
.....
脈は打っている。ハンマーに似て。
燃える息はくちびるの色をさらす。
強い視線と息があらあらしくゆすぶり
かすかな線が熱ぼったくふり動かす。
私は深いところに沸くものを感じる。
死の眠りはこれ以上は続かない。

この頃の手紙は、既に名詞を小文字で書いているが、いずれも若いゲオルゲが成長していくさま

をよく伝えている。彼は会 (congress) を開いて、同人が結束して作詩すべきだとのべ、芸術草紙の計画を夢見ている。学友シュタール Stahl にあてて草紙プラン (Mappeplan) を実現しようときそい、その他の学友ルージュ Rouge やフランス人を交え、それに英国の友からの原稿を加え、最初の国際的な草紙 („die erste internationale Mappe”) にせんとしている。„Rosen und Disteln” 以来相変らぬ一本の道が通じている。その上国際性を求めて、「そのためにはどんな努力をも惜しまぬだろう」という意気である。「私がイギリスでいよいよコスモポリティッシュになっていくのを知ってもらいたいものだ」…この頃ゲオルゲが父から受けついで開放性が花を開いたのである。理解に富む父は、息子が研究を始める前に広く世界を見る必要がある、と思ったのであった。そしてこの愛にはぐくまれて詩人が見たものは、恐らく詩人の生涯に決定的な一つの動機をつくり、それが生涯を支配するのである。彼はそのころ 書いている：「ライン地方のドイツ人は他地方の人よりも世界と多くふれあったので、こんなにも精力的で快活なのだ。ラインは常に偉大な交通網であり、大きなルートがいつも昔からそこに通じていた。ラインはあらゆる侵攻に対し最も多く苦しんだのみならず、むしろ逆に最も多くを得たのである。……フランスの支配は、われわれの国民精神を形成する上に、むしろ重要な動機をなした。他国の人々や道徳や学者などとの接触は、あらゆる硬直・盲目・愚劣・臣従・不幸などを根絶する最上の方法なのである。」この原則によって、彼はイギリスで、国際性を学び、さらに実践性を学んだ。「実践的なことを学びとり、いろいろな生活のあり方に耐えうようにするには、何も軍隊に入る必要などない。私のように英国やスイスやフランスを旅すれば充分なのだ。」このような言葉には、詩人の行動的な精神が純粋に非政治的にあらわれている。しかし実践性や国際性のみで詩人は形成されない。何よりも目的や情熱がなくてはならない。そのような言葉を求めるとすれば、彼はこういっている——「享樂する人々にわれわれのことを笑うなら笑わせておこう。人類の最善のものへの改革、支配しているあらゆる善なるもの、それはそんな人らによって成就されたためしはない。それはわれわれが帰依している種属によってなのだ。」この手紙を読むならば、形式美から道徳美へと詩人が変っていったなどいえなくなる。始めから単に美でなく、人間の最善のものがまた彼の文学のテーマであった。もちろん彼はこのころ、形式についての決意をいよいよ固め、単なる記述を信じず、現実を捕捉できぬ退屈な表現を斥け、またドラマに心が捉えられなくなった、といっているが、それは世界で最善のもの、最善の生を、美と形式というアナロジーで獲得せんとしているのである。

1889年の2月にはミラノへ、3月にはパリにと旅は続けられた。国際性といえ、ひとりでは道はロンドンでもローマでもなくパリに通じていた。子供の頃予感したもの、求めていたものがそこにあるのだ。一人の大詩人とそのまわりに集る友人の会合があるのだ。アルベール・サン・

ポール (Albert Saint-Paul 1861~1946) と知ったゲオルゲは、彼に案内されてマラルメを尋ねた。サンポールは始めにアルベール・モッケル (Albert Mockel) にゲオルゲを紹介、モッケルはマラルメのもとでゲオルゲのことを「新しいゲーテ型の人」「ヴェルテル以前のゲーテ」(eine neuer Goethetypus, eine Art Goethe vor Werther) として話した。マラルメはフモールをこめて答えた——「ではあなたのおっしゃる若いゲーテを火曜日にお待ちませう。だがその新しいヴェルテルにお伝え下さい、シャルロットヘンが原因で自殺しても無意味なことですとね。」

実際この若いゲーテは新しい時代のヴェルテルであった。彼はこれ以後かずかずの愛に胸をかき破るのであるがその全く文字通りプラトニックな愛は年々精神性を深めて、少しも昔のヴェルテルとていないのである。ゲオルゲは初面会以後、1895年までの間にしばしばマラルメを訪ねた。どんなにこの偉大な詩人が彼の心に焼きつけられたかは、例えばこんな彼の賛辞からも伺えるだろう：「おお詩人よ、同僚や門弟はあなたを好んで師と呼んでいるが、それはあなたが殆んど模倣することもできず、しかも彼らに対して大きなことをなしたからである。皆があなたの前で存立を得んがため、意味やひびきにおいて、最高の完成へと努力するからである。それでもあなたは彼らに対し、なおも一種の秘密を保留し、ただ一人永遠であるあのエデンへの信仰をわれわれに遺すのである。」ゲオルゲのマラルメ体験はこれまでの何ものとも、またこれ以後の何ものとも比較を許さぬ大きなものであったと思われる。第一に彼はこれによって真の詩人にと目覚めたのであり、また第二にはプラトニックな人間の放射する魔術的な光を浴びて、真の師を得たのであった。そしてこれから後は、ドイツのマラルメになることがゲオルゲの運命になる。ジャイメがいう通り、彼はここでどんな身振りも一つの象徴である、魔術的に整頓された過程を、最高の芸術として知った。これなくしてどうしてあの初期の詩作品が生まれ得たであろう。彼はここで、アッシジのフランツの善意を持つと讃えられる、単純な偉大さと典型的な生を持った人間を仰ぎ見た。この師がなかったらどうして晩年の厳しい人間像が形成され得たであろう。もちろんゲオルゲはマラルメの前では余り言うすべもなく黙っていたようだ。これに反して、第二の師であったヴェルレーヌとは熱心に語り、Café François I^{er} で、ゲーテやワーグナーのことを論じた。ゲオルゲはヴェルレーヌについてもものちにこう讃えている：「しかし、全世界を最も強く捉えたものは、„言葉のない歌” という、哀しくもまた楽しい人生のふしである。ここでわれわれは始めてあらゆる談義の副成分を離れ、魂が今日のためにゆらぐのを聞いた。われわれははや何らの高靴も仮面も必要としないこと、人間の最奥のものを表すには簡単な一本の笛で充分であることを知った。三筋の微かな線は風景を描き、一つの内気な響は体験を伝え、一つの色は多くの形態を把握する。われわれは、これらの節を歌いつつ一語をも発し得ないで、胸を抑える苦痛や幸福を覚えつつ、街頭や野原を進んだことを記憶する。」マラルメとヴェルレーヌの二人はおよそかけは

なれた詩人だったが、ゲオルゲは二人をこのようにあつく尊敬した。ヴェルレーヌの詩を口ずさんでパリをいくゲオルゲの日々を思うならば、彼の詩にマラルメの厳しさと共に、歌わんとする単純さがあつたのが了解できるだろう。どんなに異国のものにうちこんでも、自分の道が消えるどころか、いよいよ輝き出てくることを詩人はこの頃から生涯信じてやまなかつた。彼がこの頃から訳したフランスの詩人はマラルメとヴェルレーヌだけではない。レーニエ、モレアス、サン・ポールを始め数えられないほどだ。マラルメがポーの詩を訳すと聞き、彼は „悪の華” を訳すことに決めた。彼のボードレール熱は甚だしかった。「フランスはボードレール以前に根本詩人 (Urdichter) を持ったことがない」といっているほどである。この訳業は彼の仕事のなかでも最もすぐれたものにあげられる。彼はまたランボーが好きで、その詩も若干訳している。彼のわずかな遺品の中で興味あるのは、二枚の写真であり、一つは Café François で詩想を練るヴェルレーヌ、他はヴェルレーヌとランボーを描くものであった。また365頁に達するこの時代の遺稿があつたが、殆どがフランスの好きな詩を写しとつたものであった。どんなに大きな喜びと驚きでゲオルゲがこの時代を生きたか——それは今日のわれわれには理解できぬほどの大ききさだったのであろう。詩人が偉大な生きた詩人に出あつた感激は、われわれには想像できないものであろう。

ゲオルゲはパリで多くの友を得たが、ことに1889年にはポーランドの詩人、ロリス・リーダー (Waclaw Rolicz Lieder 1866~1912) と識つた。彼もマラルメをめぐる詩人の一人で、ゲオルゲとともにマラルメを訪い、ヴェルレーヌにも敬服し、三人でよく散歩したことがあつた。このポーランド最大の詩人の一人であるリーダーは、ショパンと同じくツァーの支配するポーランドを好まず、パリに逃れ、マラルメのサークルと交っているうちに、ゲオルゲと親交を結んだ。ゲオルゲは彼の騎士的な氣風を好み、彼と合作でポーランド語、フランス語、ドイツ語の詩句を書いた。その詩の多くは芸術草紙に出だし、珠玉の訳となつてゲオルゲ全集にも多く収められている。東方的な、あこがれ深いメランコリーがその詩の特色であり、祖国の復活に対する絶望的なペシミズムが流れているが、最後まで高貴なところを秘めている。この魂は最後までゲオルゲと結ばれて、その変らぬ友情についてはあらゆる研究書がよく伝えるところである。彼の詩にはゲオルゲに捧げるものが多いし、ゲオルゲも彼に詩を捧げたことがしばしばであつた。リーダーは1897年に歌っている：

隣国のラインの魂シュテファン・ゲオルゲを
われら精神の遺産の保護者は贅える：
彼だけが濁つたゲルマン人らの中から
誤たぬ言葉を解放し、正しくつなぎ
崇高な詩句で自分の運命を祝福し

敬虔に 誇り高い歌を歌ったのだ。

リーダーが歌っているこのような高みは、このパリ訪門によってうち開かれた。精神の富である言葉を鍛える、この高い使命を得たことに比べるならば、イタリーやスイスの旅はさほど重要ではなかった。ローマよりもアテネよりも、遺物ではなく生きた詩人のいるパリの方が重要なのだ。しかしゲオルゲが求めたものはパリのすべてではなかった。快活で優雅な都市、ヨーロッパの心臓、古代からルネサンスまでのあらゆる偉大な文化の保護者、フランス的なもののエスプリと魅力の所有者として彼はパリにひかれ続けたのであるが、しかし彼には通じぬパリの一面があった。ヴォルテールもゾラも、フランス風の機智もイロニーも彼には縁がなかった。彼の心の底には最もドイツ的な重々しさ、ロマンチックな気質、芸術家的熱情、死ぬ程のまじめさがあり、それが時折パリと矛盾して彼の気を沈ませた。それはマラルメや他の人々も気づいている。友達グリファン (Viélé Griffin) はこういっている：「いつまでも異国の夢の世界にさまよう人間の、深くて遠い視線を持つ人だ。」 きっと彼が夢の世界といったものは、その当時のパリの 現実から見ての夢の世界なのだ。ゲオルゲにとって、パリの流行、ダンディズム、世紀末思想、デカダンスほど縁遠いものがなかったことを思うならば、ゲオルゲこそ彼らのいう「夢」のなかに強い現実を見ていたといえるのである。彼はパリから抜けて、さらに南の国へ、地中海を渡って、さらに向うの赤道直下の国へいこうとする。パリからスペインに旅し、8月末にはマドリッドに、トレドにいき、王宮の跡、椰子の林、闘牛を見、それからカナリヤ群島、アフリカなどにいこうとしたがかなえられずに、9月末パリをへてビンゲンに帰った。その後ゲオルゲはスペインについて語らず、直接に歌ったこともなかったが、一生スペインに対する愛着を抱いていた。ウォルターズがいうように、長らく見失ったふるさとをスペインで再び見出したような気がしたのである。のちにベルリンで三人のメキシコ人であった時も、深い憧れに誘われ、内心からメキシコにいきたいと思った。故郷のビンゲンで予感したあの „根源” はパリに通じ、それからスペイン、アフリカ、南洋、メキシコに通じていた。これは逃避でもないしエクソチズムでもない。ゲオルゲにとっては明らかに目的にかなった行為だったのだろう。彼はパリの芸術境にひたりきりになれぬ深い心の動きを知った。生活と精神の源泉はむしろ地中海の彼方の、回教文化のアラベスク、エジプトの古代彫刻、メキシコの色彩感、南洋の太陽の光に求められるのではないか。魔的な力 *Magie, Zauber, Glaube, Beschwörung, Bildkraft*...それが詩と生活のかなめであるなら、未開の国民こそそれらを所有し、機械に征服されることなく、真に祭り、働き、生きているのではないか。高い文化を持っているヨーロッパ、偉大な詩人を持っているパリが、その頃与えるものを余り持っていなかったことを詩人の心眼はよく見抜いていた。その詩のなかに若い時から夢を聖化する傾向があるが、それはよく誤解されて、世紀末的な、デカタンス的な、ダンディ的

なものと混同されている。だが実は決してロマンチックな夢ではなく、大切な根本的な力を呪縛せんとする習作から最後の作まで脈打っている鼓動なのであった。

1889年10月からゲオルゲはベルリン大学で聴講し、種々の研究を始めた。彼はドイツやイタリーやフランスの諸文学、シェイクスピア、哲学を聴講して1891年に修了した。始めゲオルゲは文学の研究などせず、世界を広く旅行して、自分の目標を定め、それからいろんな講義を聞いて、歴史的で世界的な視野を作ろうとした。彼が生涯において示したことはいつもこの順序であった。生きた生命の個性からという立場、創作のための文学という考え、晩年の詩人の抱いた学問への疑いは、いづれもゆるがない精神の産物である。しかし何よりも彼を絶望させたのはベルリンという都市だった。ウィルヘルム二世はモナルヒーの戯画としか思えなかったし、ビスマルク流の文化政策とは無縁だし、官僚タイプは中味もなくふくれあがっているし、市民社会は病み、労働者は目覚めていない。こういうわけで彼は危うくポーランドの詩人のリーダーのようにパリーに逃れて、永遠にフランスに止まり、フランスの詩人になろうと思っていた時だった。殆んど決りかけたこの決意を彼の最初のドイツの友である、カル・アウグスト・クライン (Carl August Klein 1867~) がひきとめてひるがえさせた。ベルリンはただこの一件、いなこの人間を得たことのみで、ゲオルゲにとって重大な意義があった。この単純素朴、献身的で忠実な友は、彼にとってまたとなく大切な人となって、ゲオルゲの夢と目的と道をともにするようになる。大学で一年先輩だったクラインは、ゲオルゲにその当時のベルリンの文学事情を教えた。彼はそれから芸術草紙の創刊に力をつくし、長らく夢見たゲオルゲの夢を実現させた。のちにクライスから出て別の道を進むようになったが、相変らず草紙の最後まで(1919年)その刊行者であった。詩集「第七の輪」の Zeitgedichte (時局詩)にはクラインに捧げる詩が収められている：

爽り多い衝動となだらかな深さを持ち
大地から出た芽よ 君は 多くの飾りが
ないではなかった同志の人達に
忘れられがちな服従の勇気で立ち向い
めあてや自己のことを問わずに仕え、
今はもう役立たないと恐れると
ひそかに去って 感謝も報いも求めず
名声もなく 暗黒に消えていった……

クラインはよい詩やよい論文が書けなかった代わりに、ゲオルゲの考えをまたとなく深く理解し、それを助け、困難な仕事も恐れずにやってのけた。ゲオルゲは彼のこの献身的な情熱を長くほめて

歌っている。天才が人生でこんな友を若い時から見出せたのは、何ととっても大きな幸運であった。雑誌のためにたくさんの不必要な時間を詩人が裂くとすれば、やはりマイナスになるだろう。外交的な、政治的なことに、たとえ文学的に正しいことが多くても、まきこまれてしまうとついによくない影響を身につけるものだ。

さてこの数年のゲオルゲの創作は伝説 (Legenden) 灰色の素描 (Zeichnungen in Grau), 最後に賛歌 (Hymnen) である。ゲオルゲの詩は「賛歌」において始めて本格的な段階に入る。しかしそれができる前、1890年の始めごろの手紙はまだ絶望的である：「青春時代から回帰して悩ませているある考えにまた苦しめられます。明析な、ローマン風の音から、響きのよい、わかりやすい文学語を自分の必要のために考えだしたいのです。なぜドイツ語で書きたくないかわかりでせう。このために数ヶ月以来、何語で書くべきかに迷い、詩も書いていません。このイデーが私の頭から消えるか、それとも私がこのイデーの殉教者になるかいづれかです。」ここでのべているのは幼年時代の試みが二度目に甦り、lingua franca とか lingua romana とかいう、ラテン語、プロヴァンス語、スペイン語の要素から合成された人工語 (Kunstsprache) で詩を書こうとしたことである。今度は大変真剣な問題であり、「伝説」や「灰色の素描」というような習作をゲオルゲは始めこれで書いた。別にエスペラントへの対抗意識のようなものではなく、そうかといって意味のわからぬ美しい音の羅列を楽しんだのでもない。「ひびきのよい、わかりやすい文学語を、自分のために考え出す」といっている通り、美と意味の統一された、自分一人のための文学語なのである。良いものも悪いものもまじった、習慣と伝統と日常性の言葉から詩を書くのであるが、しかも詩人がなさねばならぬことは、言葉が始めて生み出され伝達されていった生きた状態の体験なのである。これは言葉を考察することと、本質的にはそう隔たりがない。といっても技巧で無理につくり出すというのではなく、詩人の根源的な力につくりだすのだ。すりへった、弱々しい言葉への懷疑、言葉を救い出そうとする苦闘、自分の力が足りない絶望感、それらと共に彼が最も多く悩んだのは、やはり雑誌を作ろうという熱意だった。同輩の一人一人から抜き出て、次第に孤独になりながら、今年こそはそれを実現しようと思った。こういう状態にあって、ある日突然なだれるように切っておとされたのが「賛歌」のリズムである。それが親友クラインの出現と相まって宿命的な絶望感をしづめた。1890年4月にビンゲンへ、夏にはコペンハーゲンへ、それからパリへ、10月にはベルリンへと続けて旅し、この間に処女詩集 Hymnen を一步一步完成、年内に印刷している。この薄い私家版の小冊子はクラインに捧げられた。これは完全に完結してつながりあう圏をなす詩であり、賛歌的な雰囲気につつまれている。全体はむしろ音楽ではなくて彫刻や建築に近いといえよう (Wortplastik, Wortarchitektur)。マラルメが詩句をゆるめてアレキサンドリーナーの使いふるした図式から解放したのにくらべ、反対にゲ

オルゲは異常といえるまでに厳しい詩句を作った（ジャイメ）。しかしこれらの詩を評価しすぎではならない。あらゆる若い作家に共通の欠点があって、言葉に力を加えすぎ、堅すぎる結合、文体の凝固を生み出している。しかし、ここまできるとゲオルゲの道はそれだけに若若しく、厳格すぎるほど厳格だったのだ。翌年の1891年にはベルリンからイタリアに旅し、3月にはヴェローナ、ベネチア、4～6月にはウィーン、7月にはミュンヘン、ビンゲン、8月にはケーニヒシュタイン、9月には英国、フランス、ビンゲン、秋にはウィーンという風である。この間彼はプラターテンの詩を読み、ミュンヘンでは浪漫派の研究に耽った。こうして彼はスペインやヴェネチアなどの旅の思い出をおりこんで、若々しい苦悩と喜びに満ちた詩集 *Pilgerfahrten*（巡礼）を書いて、印刷した。めまぐるしい旅と詩作とは、そのほかに友達を得んとする情熱に支えられていた。そしてこのようなデーモンがウィーンでホーフマンスタールを見出したのである。これについては、のちに考えることにするが、このマラルメ的な抒情詩のモラルにつながれた詩集は、ホーフマンスタールにこんな献辞を添えて捧げられた。

こうして私は出発した、
そして見知らぬ人となった、
そして私は求めたのだ
私と悲しみをわかつ人を。
だが誰一人いなかった。

オーストリーでゲオルゲに近づいた詩人としてはそのほかまづレオポルト・フォン・アンドリアン（Leopold von Andrian 1875—）があげられる。ゲオルゲは詩集一巻を捧げ、繊細なその詩を手書し、十年たっても賞賛してやまなかった。彼は1899年に外交官の道に入り、詩から退き、1908年にはアテネに、更にワルソーに赴任した。オーストリー没落後、徹底したプロシヤ嫌いの、オーストリー愛にもえた彼はスイスに亡命した。彼は若い時、バール、シュニッツラーと交り、殊に天才ホーフマンスタールを文学界に導き入れ、その詩に精密さと軽快さと情緒とを与え、ディレッタント的なものを抜きとってやった。ホーフマンスタールのチチアの死（*Todes Tizian*）にはあらゆる硬いところ、粗雑なところがなくなり、アンドリアンの影響が深くしみこんでいる。ルードルフ・ボルヒャルト（Rudolf Borchardt）によれば、彼は学者でなくアマチュアで、ゲーテに対しても一片のパンフレットを攻撃する調子だった。彼の詩は始め芸術草紙に出た。彼の唯一の詩集は *Das Buch der Traurigkeit* で、その他ノベレ集 *Der Garten der Erkenntnis* がある。ゲオルゲはこの得難い友を得たほか、ホーフマンスタールの友である音楽家のクレメンス・フォン・フランケンシュタインを識り、また彼を介してアウグスト・マイヤー・エーラー（August Mayer Oeler 1881～1920）を知った。二人とも芸術草紙とは密接な関

係があり、エーラーは詩作のみでなく、ギリシャ研究に長じ、アンチゴネなどを訳した。その他ゲオルゲが芸術草紙のために得た同人としては パウル・ゲラルディ (Paul Geraldty 1870～1933) をあげねばならない。ゲオルゲは1892年ベルギーに赴いて彼に出会った。ゲオルゲは彼を高く評価し——「もし私がゲラルディを詩の友として見出せなかったとしたら、母国語で詩作していこうと決心できたかどうかわかりません」と書いている。彼に捧げた詩集「心の年」(Das Jahr der Seele) 中の献詩からみても、また後に詩集を捧げたところからみても、どんなに大切な友であったかがわかる。ゲオルゲは90年代に定期的に彼を訪うたが、1899年にゲラルディがある週間雑誌の主筆となるようになって、二人の間は急に断たれた。ウィルヘルム二世をカリカチュアにするなど、始め政治的諷刺から始めたこの詩人は、やがてゲオルゲにひかれて真摯な詩を書き始めたのであったが、やはりゲオルゲの純粹精神に耐え切れなくなったのであろう。普通の雑誌はゲオルゲにとって最もいまわしいものにすぎなかった。自分の信念とふれあうところのない精神とは、決して因襲につながれて生きていこうとしないという烈しさは、既に第三詩集アルガバル (Algabal) によく現れている。ヘリオガバロス、いやむしろルドヴィヒ二世を扱うこのノヴェレ風の詩は、孤独で冷徹で激烈な気持をシュツルム・ウント・ドラング的に表現している。ここには一見人工的庭園や、デカタンスの繊細な毒があるが、本質的なところといえば美への意志と、深い悲劇においても運命を肯定する勇気である。ここにある皇帝は善や悪の彼岸にあるのであって、その不気嫌さやわれわれが読みとれる政治的解釈やヴィジオンから感じられる戦争が現実になったにしても、詩人のせいではない。サン・ポールに捧げられたこの詩集が出た1892年は、また別の意味から大変重要な年だった。この年に *Blätter für die Kunst* (芸術草紙) が、ささやかな小冊子ではあるが、不動の信念をこめて出されたのである。この年の10月にゲオルゲは病床にあったが、クライン、ホーフマンスタール、ゲラルディが計画して助け、遂に刊行のはこびになった。その後1893年にⅠの1～5、1894年にⅡの1～4、1895年にⅡの5、1896年にⅢの1～5、1897年にⅣの1～2、1899年にⅣの3～5という風に、強制なしにやや不定期にこの計画はうけつがれていった。ホーフマンスタールはチチアンの死を始めとする傑作を、ゲオルゲは第七の環 (Der Siebente Ring) にいたるまでの力作を少しづつ掲載している。そのほか詩を掲げる人はこの間にどんどん増して (K. Rouge, M. Dauthendey, A. Klein, C. Bauer, P. Geraldty, L. Andrian, G. Edwald, L. Klages, G. Fuchs, K. Wolfskehl, L. Andrian, R. Perls, O. Schmitz, W. Lieder, R. Weiss, M. Lechter, K. Vollmöller, O. Öhler, E. Hardt, F. Gundolf, G. Pauly など) 数えるにいとまがない。このささやかな詩誌が25年以上も続き、前半だけで20人以上の人が参与するなど誰が予想できただろう。巻頭にははっきりした態度がいつも箴言の形で書かれ、国家的なものや社会的なものを排除し、規則やならわしにかかわらず、平板

なものや古くさいものを打破し、卑しいもの低いものに近づかず、ただ美とあらたなものを求める若い人々にいつでも門を開こうと強調されている。耽美主義やデカダンスとは関係はない。その細部の主張については別に分析すべきである。この草紙はその他いつも新鮮な、生きた現代詩人の詩を世界から集め、それを訳出している。彼ら同人はこの草紙でヤコブ・グリムにならい、理想的な時代であったカロリナ王朝期の小文字体を使い、句読点も最小限に止め、文字の美しさにも多くの配慮をした。これは将来でもきっと問題になるだろう。どんな小さなところにも気を配って完璧を目指したこの草紙も、国内では反応なく、パリの L'Ermitage, La Plume, ベルギーの La Wallonie, Floreal, アムステルダムの Nieuwe Gids 等の外国雑誌に注目されたに止った。1892年にボードレール記念碑建設委員として、ドイツ人からゲオルゲだけが選ばれたが、このような事情を思うにつけて、ドイツ国内の詩壇の状況がどんなものであるかよく想像できよう。ロマンチックなドイツでは意志的な人間が芸術を仕事にすることを理解する人がなかった。彼らにとっては、リルケもゲオルゲもわからず、ロマンチックな詩人のほかは、ニーチェ好きかマルキストなのだ。(eine unglaublich dünnblütige Vorstellung vom Dichter とジャイメがいつている。) ビスマルク時代にゲオルゲはナツラリズムの闘士よりも風変りな存在とされた。ドイツ人はなかなかこの詩人になれ親しむまでには至らなかった。そして親しんだらすぐにまた誤解するのであった。時の最大の人ゲオルグ・ブランデスすらこういった: Merkwürdig, aber schwer zugänglich, feierlich, aber nicht fröhlich (変っているがなかなか近づきにくい。壮重であるが楽しげではない)。今日からみればこの草紙は強大な力で文学界に地歩を占めたように考えられがちだが、僅かな部数の、ごく限られた読者しかない、手から手に渡されて読まれた小冊子であったことを忘れぬようにしよう。

芸術草紙創刊までのゲオルゲの歩みを追うのに急であったが、彼の青春はこの運動のみに捧げられたのだろうか。青春のできごととして女性との関係がなかったであろうか。作品ではあらゆる恋愛的なモチーフが直接支配せずに、他の重要な目的のために影を薄めている。研究によればそれは イーダ・コブレンツ (Ida Coblenz 1870~1942) との関係である。彼は彼女を1890年にビンゲンで識り、それ以後よく彼女の家を訪れた。二人の関係は誰にも妨げられず、椅子に坐って先祖の写真を見たり、散歩したりした。ことに1894年の秋や1896年の秋にはナーエ川をさかのぼり、ドルーブス橋やロフス山に遊んでいる。ぶどう畑を縫い、古い墓地を歩いてさまよい歩き、また一夜のうちにヴェルレーヌを訳して熱情的な表情で読んできかせた。それらはヴェルレーヌの切々たる恋詩で、いずれも有名で甘美なしらべであった。よく旅に出たゲオルゲは、帰ると手紙を送って彼女に会った。実際には彼女にさまざまな詩が捧げられている。彼女の前で架空の

庭園 (hängende Gärten) の詩が始めて朗読されているし、創作者への忠告 (Rat für Schaffende) も彼女のために書かれたものだ。また二人は詩句の良否を長く論じあった。こういう時ゲオルゲは誰とも交らず、どの友達もゲオルゲを介してイーダを識ったことはなかった。これらの事情から二人は恋人だったと推察されるにすぎない。実際は彼女が彼の詩をよく理解できる、優雅で才能のある女であったから、精神的なもの、芸術を介して、お互いに結ばれていたであろう。だが二人の性格は余りに違って、それ以上に近づくことはできなかった。或いはいいかえると、ゲオルゲの緊張した歩みと相和してゆける女というものは、考えられないことなのだ。1895年4月、イーダはある商人と結婚した。しかしうまくいかず、ゲオルゲに、「どうしてあなたがあの時制止して下さらなかったのですか？」と離婚後に訴えている。ゲオルゲは答えた：「あなたは私の顔の中に読んだことがないのですか？ 私の一生の苦痛 (meines Lebens ganze Qual) であってこれからさきもそうなるだろうと思われるようなあのできごとが、私にとって厭わしいものだということ？」この返事からイーダを失ったゲオルゲの苦痛が大変大きいものであったことがわかる。それから後イーダは詩人デーメルと結婚する。彼女はゲオルゲとデーメルを結びあわせようとするが成功しない。二人ともヴェルレーヌの崇拜者であるのに、草紙のことにになると全く意見があわない。その上デーメルの作品はゲオルゲにとり最も厭わしいものだ。一度彼女の家でデーメルとでくわしてから、ゲオルゲは手紙を書いてイーダとの関係を断ち切った：「われわれの間で友情が生ずるのは、一人が他の人に偉大さと気高さを移し入れうるときです。また友情が失われるのは、ある者に粗野で卑しいと思われた人が他の者に偉大で気高いと思われるときです。」こうして二人は遂に避けあう身になってしまった。二度ばかり偶然出会ったことがあったが、二人とも顔を下げて、見ぬふりをした。

私が君の橋の上にくると

川からささやきが昇ってくる：

昔ここに君の光が射していたと。

君が私のいく道に立ち現れても

私の目は見つめずに帰ってくる、

身ぶるいも挨拶も知らないで。

ただ心からのお辞儀をして

いつもと変らぬ仕方でいっただけだ、

見知られぬ 私に残された道を。

見ぬふりで昔の恋人の前を通過し、ただ誰もがやる心からのお辞儀をするというこの詩は、いか

にもヴェルレーヌの詩と違っている。ロマンチックに昔を回想する恋人の対話ではなく、歯をくいしばって、倫理的に哲理的に考える詩人のありさまがよく出ている。イーダがいうところでは、この詩も、これに続く詩もイーダに向けられた詩である：

鉄を私から掘り出す者よ
酒を私からすすする者よ
失ってなお喜んでおののく私だろうか。
君の悩みをいやほど食べたから
施しを節約してみようか。
君をひつぎにおしこめ
君の心ぞうに杭を打とうか。

恋はあらゆる身心の富を奪って吸いとってしまう。恋が鉄の信念と酒の魂を盗みとる。いっそ恋人を葬り去り、恋人の心に杭を打ってはそののである。しかし詩人はこういう疑いにとざされる時ばかりではなく、あるときは愛の一語を性急に求める散文詩をも書いた。この *Ein letzter Brief* もイーダ自身のいうところでは、イーダにあてて書かれたものだった。(但し Helmut A. Fiechtner: Hugo von Hofmannsthal はホーフマンスタールあてのものとして解している。)「君は愛していないのに笑えるが、私はただ憎めるだけだ。君の軽やかな優雅さはたくさんの人を満足させるが、私はそれとこの一語と引き換えたりできないのだ、君がその一語を見つけて、私を救わねばならないのに。君は一夏中形のよい雲の話や森の謎深いざわめきやなごやかなフルートの響きについて話したが、このただひとこととなると口を開いてくれない。君がこの言葉を知らないなら、君のすばらしい美しさも、君のすべての靈感も何だというのだろう。いや一語ではなく、一息、一ふれよりも少くてよいのだが！ 君は知っている——私がひるもよるもそれを待っていたのを。私はそれを言えなかった。ただ夢で予感していたのだが。私はまたそれをいってはならないのだった。なぜなら君がそれを見つけねばならないのだから。それでは、好きなように夢見、行動しなさい。もう三人共通のものは何もない。もし君が私のすぐそばに来たら、私は君を憎み、また君が遠くにいたら、忘れてしまうだけだ。」この手紙は「散文詩」になっているが、ゲオルゲとイーダの恋愛の一こまを伝えるものと考えてよいだろう。そのほかゲオルゲの作品の中にはこの事件と関連のある詩をかなり発見しうる。殊にゲオルゲは心の年一巻を始めはイーダに捧げるつもりであった。この詩集に愛の詩が多いのも当然である：

悲しみにみちた夜だ、
びろうどの喪の覆いが
愛が戦う部屋の

わが歩みをつつんでしまう。

わが願いは死を与え

蒼白のものいわぬ愛は

ひつぎに安らかにいこう。

そのまわりに光がともし、

やがてそれも燃えつきる。

私はやにわに走り出ていく。

愛が死んで家の中には

むせび泣きがひびきわたる。

もしゲオルゲに愛のことを聞いても、そんな好奇心はあっさり断われたとヴォルターズが書いている。彼には静かに道をいかせ、日々のことに熱中させるほかなかった。しかしこの破局が、ゲオルゲの女性観を終生決定したということは、殆んど可能なことに思われる。あるときゲオルゲはベルリンで、「一人の女性のほか殆んど私が知ったことのある女性はいません。彼女は昔私のすべてだったのです (Die war meine Welt)」といった。ゲオルゲはハンナ・ウォルフスケール、ザビーナ・レプシウス、ゲルトルート・カントロヴィッツ、エディート・ラントマンなどの多くの夫人と交ったが、これらとイーダとの交友は全く別物であった。彼のサークルからは次第に女性が減少していった。ただしゲオルゲは90年代にルイーゼ・ブリュク Luise Brück という女性と交ったこともあったが、これもとりあげていえるほどではない。ゲオルゲの女性観については作品から分析するが、それも恋愛と友愛との区別不能に陥ってむづかしい。結局ゲオルゲは性的な愛を完全に分け隔て、次第にプラトンの愛に近づいていったのだ。その最も大きな動機となったのがイーダとの交りであった。

私は次に、ゲオルゲの体験のうち、最も大切なものとして、ホーフマンスタールとの交友を分析し、解明してみようと思う。彼が出あった詩人のうちで、外国語で書く者ではマラルメが、ドイツ語で書く者ではホーフマンスタールが最大のものであった。この二人の相会は十五年の長い日々のうちで十指に満たぬほどであったが、——のみならずその会合時間もいうにたりぬほど短いものであったが、二人の交友の記録として残された往復書簡は、大作を味うに劣らぬ楽しみを与えてくれる。一見さほど深い交りもなく、協同の舞台のためにも燃え立たず、こんなに長く互に敬意を払い続けているこの書簡集は、ゲオルゲ研究の点からも、ホーフマンスタール研究の点からも実に大事な文献に数えられる。特に伝記的素材に乏しいゲオルゲ研究のためには、唯一の

事實的資料だといえる。なぜならここでは、この偉大な二人の詩人の関係が——というよりも二つの基本的創作態度が明るみに出されるとともに、ゲオルゲの交友の仕方が根本的な原型としてくり上げられるからである。

三十年もたってホーフマンスタールは二十五才のゲオルゲとの出会いをこうしている——「十八才のころのある夜、ウィーン市のコーヒ店で英語の雑誌を読んで座っていると、突然、不気味で支配者めいた顔立ちの、未だ非常に若い、だが私よりずっと年上の男が歩み寄ってきたが、これがゲオルゲだった。彼は、私を探し、ただそのためにのみウィーンにきたのだといった。この会合のおかげで私の生活は大変不安になったが、つる不気味さのなかにも、力と愛と希望を与える人が存在しているのだと感じたのである。」更に彼は死の五ヶ月前にも書いている——「中介もなく彼は私に近づいた。かなり夜おそくコーヒ店で座っていると、著しく特色のある男が近づき、顔に高慢で情熱的な表情を浮かべ、彼が結束せんとしている数少ない人の一人が私であり、私がオーストリーにおけるただ一人の友だとのべた。彼は、詩とは何かを予感している人の協力が問題なのだと強調した。われわれはその後数回会って、ヴェルレーヌ、スウィンバーン、ロセッティ、シェリイなどが独特の話題となった。二人は一体になっていた。ダヌンチオも、もちろんマラルメも話に出た。彼は協力について、計画すべき草紙について話した。私は彼に送る作品について話した。要するにこの出会いは決定的に重要なもので、私の内部にあるものを確かめ、欲しさえすれば決して孤独な変り種でなくなりうることを教えてくれた。」ところでこの温かい過去への追想は二人の出会いのすべてを表現していない。1892年1月の、ホーフマンスタールあてのゲオルゲの書簡を読むと、すぐに二人の会合が限界につきあたったさまが伺える。「久しく私は、一切を許し、理解し、尊び、私と共に万象の上を翔りうる、超俗的で侵襲的な、繊細な精神にあてがわれている。しかもこの人間は妙なことに、霧のようなヴェールをかぶり、ロマンチックな粉飾のもとに高貴さや名誉から隔たり、自分を解放することを知らない。彼こそ私に新しい衝動と希望を与え、私を無からひきもどすはずなのに。……この超人を私は休みなしに求めてきた。……大きな精神の危機が迫っている。希望、予感、震動、動揺……おお兄弟よ、それだけなのか。……現代に、重要な精神同盟がもうできないのだと私は思う。たれもみなある種の生活のクライスに入り、そこに依存し、決して離れられない。そしてわずかな変更しかできない。重要なことはもうそなわっていて、人生のクライスの外にあるほかの形式に何かを持ちこもうとするものは暴徒だとみなされる。……」この手紙にある通り、あのゲオルゲ独特の愛が、ここに始めて烈しく働きかけたのだ。ホーフマンスタールは自分を投げ出して交っていく用意があると答えはするが (Ich kann nur mich selbst geben. Ich kann nicht anders, mein Wesen giebt den Wein seines jungen Lebens aus. Wer nehmen kann, nimmt.) 「めまいのする高みに

立って、誰も見えない深淵を愛している」デーモンを不気味に感じ、次第に答えることができなくなる。この威圧からどうして身が守れよう！ 彼は苦しみ、ゲオルゲから逃れ、父の背後に姿を隠す。父は無理強いして交際せぬように頼んだ。こうして1891年12月中旬からの短い会合は終りをつけた。ゲオルゲは一月中旬ウィーンを去った。この期間にホーフマンスタールは「予言者」と題して、「彼は触れずして殺すことができる」という詩句で終る、まさに直覚的にゲオルゲの本質を捉えたソネットをしるしている。また「過ぎ行く人に」と題して歌っている：

ひそかな、私の中のものを
君は私に暗示してくれた。
君は心の絃にとって
夜のささやく風であった……

われわれはホーフマンスタールの「道と出会い」というエッセイを思い出す。彼の会合は心に、空ゆく鳥の飛翔のように痕跡を残すものだ。だがゲオルゲにとってはささやく風やつめいた声やひそかなまなざしではない。このデーモンが鋭い力強い足どりで、西ヨーロッパを転々としてここまできたのは、この東の国で全人間を、デーモンを、愛を獲んとしてであった。だが彼のウィーン訪問は第一歩からつまづきだった。彼の胸は深い傷をうけ、咲いたばかりの友情は抑えられたものになっていった。

ベーリングルがあんだ書簡集は、ホーフマンスタールの家族の協力を得てできたもので、大変ゆきとどき、両者それぞれ百通以上の、1896～1906の書簡を含む。若干失われたものもあるが、二通の例外のほか重要であっても不可欠なものではない（シュタイナー）。全体は四期にわかれ、第二期はクラインが表面に出て、二人の間を円滑に保持しているときをまとめている。さて、別れてから数ヶ月の後に、二人は再びウィーンであい、芸術草紙の計画が話題になり、ホーフマンスタールはこれを承諾賛成している。ゲオルゲはホーフマンスタールなしに草紙を始めることができない、というシュタイナーの考えが正しいかどうかは別として、とにかくゲオルゲは草紙以外の雑誌に作品を出さぬように乞い、ホーフマンスタールは有名な「早春」や「チチアンの死」を寄稿することになった。だが時がたつにつれて二人の動きがくい違ってくる。1892年11月の、「先週のあなたの手紙から疲労し切った悲しい息が押し寄せてくる、私は自分もうつされたような気がする」というゲオルゲの言葉が示す通り、ホーフマンスタールの詩作品が少なすぎるものが往復書簡に漂う暗影である。時に約束と違ってホーフマンスタールの詩が他の雑誌に出たことや、草紙に同人の写真を掲げるのになかなか応じなかったことなどが示す、協力というものに対する一種の懐疑は、この創作不振と全く別のことからであるにしても、相乗じてゲオルゲの心をいためるのに充分であったであろう。作品が少ないことは協力していないからだというような考え

がいつもゲオルゲの心にあったようで、それがわれわれにとって真実であるようにも感じられてくる。1893年7月にゲオルゲはこう書いている——「あなたはわきにそれで何も聞けないといわれる。だがどうして大道に出てこれないのですか。どんなことでも文字や手紙で用が足りないことがあります。あなたはそれを知っている。しかも理由もなく説明もなく避けている。」とうとうホーフマンスタールは同年に臨時会員として、好意ある公衆という中立性をもって臨みたいと申し出ている。とにかく双方の出す疑問は解かれず、ゲオルゲは再会を求め、ホーフマンスタールは避け、誤解のうちに沈黙が一年続く。

第三期に入ってもゲオルゲは、再び呼びかけることをやめない。「こんなに純粹で美しい試み、こんなに芸術的なクライスから、いつまでもあなたが離れていられるとは決して信じられません。」しかしホーフマンスタールはクライスに対してある種の距離を保ちたいと答える。重ねてゲオルゲは、力を活潑に借してくれるように、無価値な公刊物に力を流さぬように乞うのであるが、やはり近づいては遠ざかる波のように捉えどころのない状態が続く。しかしこうして二人はその間にも互いの認識を深めて、他の誰に対しても見出すことができないような言葉を用いている。詩集「巡礼」を捧げたゲオルゲはホーフマンスタールの詩に賛辞を惜しまず、「あなたの詩のどの一節もわれわれの新しい戦慄を、新しい感情を富ましめぬものはない」とのべた。またホーフマンスタールが「牧人歌」について書いた批評は、最も高貴な散文であって、「ただ詩人のみが望みうる解説、乾いた心に降る春の雨」とゲオルゲが感謝している。だが二人の詩の成功と思想の形成は不幸にして並行しなかった。ゲオルゲにとり詩作は作用であり、自分の見た形象によって人間を形成する力なのだった。若い人との相会を重んじたゲオルゲに比べ、ホーフマンスタールはクライスも同志も欲せず、ただ自然な仲間と生活した。だからゲオルゲが完全な協力を要求してくると、ルーズな関係の中に波乱が生じて、どうしたらよいかに困ってしまう。彼はゲオルゲが何を欲するのかわからなくなる。例えばゲオルゲと結ばれていても、そこからクライスへと一歩ふみ入ることになると、どうしても足が重い。何年も空しい努力を重ねる手紙の中でも最も緊迫したものは1896年の、草紙拡張案をめぐる往復書簡である。「誰のために確信をもって進んでいくのか」という、深い疑いをこめたホーフマンスタールの手紙に対し、ゲオルゲは半年の沈黙で答えた。思うに、ルーズなまたは自然な結合と、緊密なまたは組織的な結合といずれが精神に必要なかは、何の説明によって答えるすべもないのである。今度はホーフマンスタールが歩み寄って手紙を出す。ゲオルゲはすぐに喜んで、歌を捧げて歩み寄る——

今日は平和を結ぼう、私は許そう、

高貴な血に混る一しづくの毒を。

流れ転ずるふしと 火花を出す

上手な話の発明者よ。長らく分れたので
思い出の板の上にしるしたふいぬい憎しみを
私は消そう、君もそうしてほしい。
煙りと雨につつまれた梯子に昇り
われわれ二人は沈みそうだ。二度と子供の
賞賛や歓声が媚びるのを聞きたくはない、
君の耳をとよもす詩句を響かせたくない。

こうしてゲオルゲは余りに厳しく、相手の特殊な思いを無視して交渉してきた自分を責め、同時に心から、静かに協力を求め、終りにこう書いている——「協同の仕事では（ここであなたがうなづいて承認して下さることが非常に重要なのですが）同じく重要なこととして人間に対する最高で絶対の尊敬と、いくら違った努力をしても見られる芸術観の一致とが必要であって、そのためにある人に悪くて厭であるものが、他の人に崇高で近づくに値いするようになることは許されてはならない。」しかしこのような言葉もむなしく、やがて意見は喰い違ってくる。ホーフマンスタールはデーメルをほめるが、その詩はゲオルゲの最も嫌いなものだった。デーメルは欺瞞する力をもっているからだと言っている。ホーフマンスタールの方は逆にクライスに常に不満を覚えている。また彼は1896年の手紙にあるように、独自の観念を築いて、ゲオルゲにはわからない方法で生きている。例えばゲオルゲはこう書いている——「あなたは書いている、彼は全く人生に属し、芸術に属していないと。しかしこれは殆んど冒瀆だといいたいほどの表現だ。芸術に属していないものが人生に属しているかどうか？ どうです？ この野蛮だといえる時代に？」 美しき生という言葉で捉えたゲオルゲの論理に対して、ホーフマンスタールは一見常識的な二元論を、「672夜のメールヘン」などで展開している。ひとたびこの人生と芸術の分裂症にかかる、詩の力は目に見えて衰えていくものだ。ホーフマンスタールはその衰弱を肯定し、ゲオルゲは否定する。前者は詩から遠ざかり、別の言葉を求め、生の問題性に沈潜するが、後者はラテン的精神でますます詩句を信じて練っていきこうとする。ゲオルゲのクライスに対する考えは、こうしてホーフマンスタールのに比べ、ますますはっきりしたものになっていく——「あなたは高い、よく似た考えの人の交りは危険かも知れぬという。高いなど冗談ではない！ よく似たなど考えずにいる！ 類似性というものは前提になっているだけで、すぐ距離と溝が生じ、それを架すことが、いつも日常性に逃げてしまえる小径を探ることよりはずっと魅力のある、報いの多い仕事になる。凡そ自分と同じ、またはより堅い石で身をこすらないことよりも危険なことはない。」

1899年に偶然二人はベルリンで出会った。ホーフマンスタールは上演された劇の批評を求めたが、ゲオルゲは絶望して姿を消してしまう。作者の努力に対し、ひどい批評を下すに耐えなかったのだ。このころ二人の芸術は今迄ない程に隔ってきたらしい。ゲオルゲはホーフマンスタール

の演劇に同感できない——しかもホーフマンスタールに大きな期待を寄せながら。「時代の偉大で内面的な歌は既に歌われた。だから誰でもそれをうまくまねて歌える。時代の偉大で美しい話も既に語られた。だから多くの人はずまくまねて話せる。だが偉大な劇作品はまだ作られていない。それをわれわれはあなたの外の誰に期待できようか。」1899年—1902年の沈黙は三年間も続いた。そして漸く手紙の往復が始まるのだが、二人とも最後の力を傾けて努力し、緊張感にあふれた、大変興味のある書簡集になっている。ホーフマンスタールは何とか和解していこうと努めている。今度はホーフマンスタールの方がしきりに呼びかけてゲオルゲを招こうとする。二人は互に自分の立場と姿勢をわからせようと力を傾けて手紙を書く。遂に成果があって、1903年にミュンヘンで一週間の間会うことになり、友交裡に意見を交え、それから1903年にベルリンのレブシウス家で一度、1904年ロダウンで一度会っている。最後の場合はグンドルフも同行している。しかしこのような努力も二人の溝を渡すことができなかった。ゲオルゲはホーフマンスタール詩集出版の労をとり、ホーフマンスタールは詩についての対話を書きゲオルゲを賛え、互いに敬意を表明したが、二人の協同ができない限りいつも友情は壁につきあたってしまう。ホーフマンスタールはこのようにのべて自分の立場を説いている——「生を支配するとか、心情が主だとかいう表現を、真の畏敬で満たされていない人の口から聞くことは、私にとっていやなことだ。私はむしろ凡庸でも生を表明して、素朴な民謡風のひびきを使う詩人の方が好きだ。それは長らく胎動して、新しい、抑えられた音として甦る機運にある。」この言葉にはホーフマンスタールの詩に対する考えが、はっきりと伺えよう。さらに彼はこう書いてクライスを暗に批評することを忘れなかった——「私のまわりにいる人達は生から、友情の本能から形成された人達で、どこからみてもそう教化的なところがなく、私の周囲の人々の個々の作品に対して私がそう敬意を払わないということが了解されている。」何よりもしかしホーフマンスタールは、ゲオルゲの最も厭な言葉を使ってではあるが充分に控え目に、自分の開放的な道を示した——「私の中にはきっと詩人の力が他の精神的な衝動とあなたより強くまじっているのだ。私は子供の時から、この混乱した時代のいろんな道で、いろんな衣裳でまにあわせたいという、熱につかれたような努力をしてきた。そしていわばジャーナリズムのような衣裳が——といっても非常につつましい意味で、ラスキンのような、ドイツでは代表する人のないジャーナリズムであるが——それがしばしば私を強くひきつけた。」しかしこのあり方の結果が——ホーフマンスタールの非協力、というよりも詩作の不毛と不活潑が——二人の交渉に直接の打撃を与えた。「チャンドス卿の手紙」にあるように、彼にとっては全く純粹な改革のための沈黙なのだが、このゲオルゲに送られた散文も、ゲオルゲの耳に新鮮にこだまることがなかった。和解をはかるホーフマンスタールは「救われたヴェネチヤ」を友愛存続のしるしとして捧げるが、そこに扱われている二人の対照も、ゲオルゲ

の不快を買ったにすぎなかった。こうして友情はだんだん冷却し始める。献辞をとり消したホーフマンスタールは、「私は昔よりあなたに対してより疎遠になったり、冷淡になったり、友愛を失ったりしているとは思わない」としている。書簡の最後には二つの悲しいできごとがおこり、交渉が切れてしまう。詩作以外の方法で公事に手を出さぬゲオルゲにホーフマンスタールは戦争反対の署名運動を求め、戦争は無秩序な政治家の無責任な政治から起るもので、詩人とはかかわりがないという拒絶の返事をうけとった。またホーフマンスタールは芸術草紙の世話で出された出版をとりやめて、別の書店から出そうとするが、これが最も大きな直接原因となって、1906年の3月で往復書簡は終わっている。あとにはゲオルゲの遺稿に、われわれが誤解するような事項が一つとして見当たらないのにと書かれているだけである。もし一つでも決裂の原因をこのころの手紙から探るなら、ホーフマンスタールの詩集が芸術草紙から出されているという事実を、ホーフマンスタールがとり消して変更したこと、いわば協力を不信の形ではっきり拒んだことがあげられるほかないだろう。

こうして二人の交りが終わったことについては、いろいろな人がいろんな解釈を下している。ヘルベルト・シュタイナーが最も広範囲に交りの失敗の原因をつきとめようとしているのでその考えから紹介してみよう。彼によれば、詩人相互の関係はいつも秘密にとざされているものである。単に片方の詩人が存在しているだけで、他方の詩人の詩が促進されたり、まひさせられたり、不安につきおとされたりすることもある。「あなたの詩句のどの行も私を熱中させ、私を喜ばせ、そのために自分で短い詩を書こうという能力をなくしてしまう。」とホーフマンスタールは書いている。どんな秘密が二人の心のやりとりのうちに生じて、それが交渉を難航させたか、はっきりいえないのだが、シュタイナーはそれを一つはゲオルゲ側の態度に、一つはホーフマンスタールの人生観に求めた。ゲオルゲは他の世界に対し草紙を閉ざしたが、それがひどくホーフマンスタールの気にさわった。もしゲオルゲがホーフマンスタールを拘束しようと思わなかったら、もっと近く彼をひきつけ得たであろうに。ホーフマンスタールの手紙は極めて多く、たいいていは書き下ろしで、瞬間的対話的だが、ゲオルゲの方は熟慮に満ち、控え目で、時には不信でさえある。ゲオルゲの手紙が草稿なしに書き下ろされ、あの草稿のように人間的で開放的であったなら、もっと状況は別だったかもしれない。またゲオルゲをめぐる若い人達、グンドルフやウォルタースのホーフマンスタール評価がかなり手厳しいものであって、師と弟子の関係、祝福と被祝福の関係で捉えたことも、二人の交渉が再び開かれなかった原因ではないか。しかし私はシュタイナーのいう、これら心理的で繊細な態度にかかわることからよりも、思想的な、世界観的なものに重点をおきたいと思う。ゲオルゲは詩人を特殊な、それ自身の、人間に対置された存在と思った

が、ホーフマンスタールにとっては、詩人と非詩人の相違がなかった。それをわけるのは虹を分けることができぬのと同じなのだ。だからホーフマンスタールは金を払わぬ同人誌よりも、払う方に出すのが人間的だという考えをぬぐい去ることができない。ゲオルゲは企業的なものにさからって、そんなことを考えるひまもない。そのうえホーフマンスタールは父が破産したので、父を苦しめずに独立していきたくかった。そのためにも報酬がどうしてもいる。ホーフマンスタールは普通の平凡な人間であることをあきらめきれない。伝来の社会の図式に入り、社会との結合を求め、時に自作への不快感、不安、動揺にかりたてられた。新聞的で、生活派的なホーフマンスタールに比し、ゲオルゲは世界を裁き、変化せしめ、一点から捉え、鋭い価値の線を引いた。このようにしてゲオルゲは芸術のジャンルにも早くから限界を設けた。ホーフマンスタールは決してそうせず、早くから劇場に向おうとしたのだ。こういうシュタイナーのいう世界観の差異をもっとしぼって、ルードルフ・カスナーはこうしている——「ホーフマンスタールは公衆を、社会を、自然を、クライスを超えて欲し、自分の道をそこに具現せんとした。要するに彼は劇場を欲した。そこから詩人はドイツ人やオーストリー人のような非政治的な国民に語りかけんとした。だが戦いの成否は公衆一つにかかっている。ホーフマンスタールは成功したいと思った。」以上のようにシュタイナーは世界観から、特にカスナーはそのうちの演劇観から二人の交渉に閉鎖性と開放性を見ている。

大体これと同じことをエルンスト・ロベルト・クルチウスはもっと根本的な見地から、すなわち文化的で歴史的な見地から総括してのべんとした。二人の詩人には若い時代に全く共通だといえる要素があった。それはローマニッシュな言語と詩の精神を身につけんとすることだった。ゲオルゲをひきつけたものはフランスであり、スペインであり、南方であった。彼の根本的芸術体験はフランスにおいて始まった。ローマン語を技術的にマスターし、そのフィロログであるのみか、Lingua Romana という新しい言葉さえ案出したゲオルゲである。「南方で完成を求めるのは、ドイツ人の神聖ローマ帝国の永遠の法則だ」——「北方精神からドイツ人は多くを学ぶ必要がない。ドイツ人はそれを歪めた形で持っているのだ。だがローマン的精神からは明析さと、広さと、感覺性を学ばねばならぬ。」こうやってゲオルゲは精神的な意志で、内部の親和力から擱んだものを改造し、時には力を加えすぎることがあった。彼の精神の形姿にみられる根本特徴は、あらゆる無関係なものを自分の意志の法則で刻みつけ、征服していくことにあった。彼は教養のどんな要素をも独裁者のように選び、立法者のように基礎づけた。だがホーフマンスタールはそうではなかった。その道は自分をひきつけるものに身を委ねていくところにあった。彼は自分を失うように見えながら、最も無関係なものの中にまで、自己自身の国の属領を見た。しかもそれは広くて、夢のように、あこがれのように漂う風物としてである。彼はそれに身をな

らし、身を変化させていく。それはいわばオーストリーの運命を写していた。「われらはローマ帝国の後継者である。欲しようが欲しまいがその運命を担うのだ。」十一世紀以来のハプスブルク君主国が彼のいうオーストリーの歴史的遺産であり、ホーフマンスタールはその合法的な遺産継承者なのだ。決して設立者や立法家ではない。だから彼がローマン的要素にゲオルゲと同じく接したとしても接し方が根本から違う。ホーフマンスタールも若い時フランスから刺戟をうけた。ブルジュやスタンダールが彼をひきつけた。「モデルンとは生の分析と生からの逃避だ。自己の生活の解剖をするか夢みるかだ。モデルンとは古い道具であり、また若い神経なのだ。」だが彼はやがてこの境地を脱して、モリエール、ラシーヌから、バルザック、フローベル、ユーゴーまでの偉大なフランス人ととりくむ。この五人がホーフマンスタールを生産的にする。彼のローマン世界に対する関心は、ゲオルゲよりもずっと広いスパンを持っていた。それもずっと開かれていて、献身的なのだ。これらのフランス古典は社会の諸相の中にとちこめられていて、世俗的な近さ、広さ、知恵を具えている。ゲオルゲはこんな広さをむしろなげやりな怠惰によるものとなした。自分が形成できぬものは否定し去った。それは稀にみる不寛容だった。ホーフマンスタールはすべてに拘束されていたが、ゲオルゲはすべてを離し、断絶した。後年にはダンテを除いたロマン世界から手を切っている。そしてダンテのように時代を裁こうとする。このようにクルチュウスは二人のロマン文化の取り入れ方の差を研究し、この面にみられる閉鎖性と開放性を明るみに出している。

こうしてシュタイナーのように考え方から、カスナーのように働き方から、クルチュウスのように文化の摂取から、二人の差異を考え、協同が満足に完結しなかった理由を考えていくのは至当だといってよい。だがルードルフ・ボルヒェルトはこの考えをもう一步押し進めて、時局の面から、政治的な影響をほのめかせつつ捉えんとしている。磁鉄の意志の塊のようにすべての動揺をすぐならし、自ら中心に成れたゲオルゲ、この力に飢えた権力の人が、この繊細で堅いイタリーの血をうけた詩人をなぜ支配できなかったのか？ この二人の決裂は決して単に個人的な事件ではなく、「未だ隠されている大きな歴史の危機」と関係のある事件なのだ。ホーフマンスタールは自らのために事を決めたのではなく、自由のために、ゲオルゲ運動を限るためにそうしたのであった。彼が協力を控えたので、クライスはドイツ詩を刻印づける大きな力を持ち得なくなる。詩を窒息させるクライスは、再びドイツ詩を17世紀のように、手法のバロック化に導こうとした。ホーフマンスタールは精神と詩の自由を守らんとして、クライスの思いあがりを抑え、伝統に生気を吹き込み、生の空間を保証した。こういうボルヒェルトの説は、もしホーフマンスタールがゲオルゲの運動に同調したら、バロック、ヒュブリス、ティランナイにドイツ詩を押しやっただけに違いないという大いにホーフマンスタールに同情した説だといえよう。だがこれはゲオルゲが最

も憎んだのがバロックやヒュブリスなどであったこと、この時代に秩序的精神の役割が大きかったこと、それが要求されていてその時代の善意であったこと、ボルヒェルトがクライスの中の若干の人物とゲオルゲを同一視していること、ボルヒェルトの主観的な見方が感情を交えてのべられたことなどから考えて、とうてい同調できない考えである。二人がもっとうまく協力できたら、不隠な、右翼的なクライスの分子はもっと早く姿を消していたであろうし、ドイツ詩がもっとすばらしい華かきを生みだしていたであろう。やはり私は協力できなかったことを悲しみ、残念に思う。ましてボルヒェルトのように、喜び、ほめることなどできない。「政治的な、完遂の危険性にふるえる年上の詩人」とのべ、精神の政治と国の政治を無理強いした比喩で一つにし、大戦という、二人の知らぬ現実から、二人の関係に圧力を加えて誤解しているボルヒェルトの考えに、今日人は知らず知らずのうちに陥りがちだが、いつかはもっと正しく見直される時がくるだろう。ボルヒェルトは二人の関係は協力というに値いせぬものだったという。協力なしにホーフマンスタールがなぜ幾度も詩を送り、百通もの手紙を書き、十五年も交際し続けたといえるのだろう。もちろんボルヒェルトはゲオルゲの偉大さを賞揚するのを忘れない。ホーフマンスタールはゲオルゲにふれるや、数週間のうちに鍛えられた鋼鉄に成長し、アンドリアンから譲りうけた半端な、虚飾的な、自他のまぜものは一撃のもとに本物になって光り出す……(Einem unsicheren Verhältnis von Erfahrung zu Ausdruck, von Geist zu Eindruck, von Sinnlichem und Sittlichem, von Mitteln zu Pflichten begegnete die bannende Welt aus Lot und Scheit, aus Sims und Last, Ja und Nein, aus Sinnbild und Bildsinn, die zur Weltumfassung ausgreifende Hüttengesinnung eines mit lichten und dunklen Mächten im Geheimbunde stehenden Merlin oder Klingsor...)

ドイツは始めたばかりの教養と政治を同時に破滅させる悲劇をなめたが、二人は破滅寸前の改革者であり、ドイツ、いなヨーロッパの最後の詩人であったのだ。だがその二人の革命像は著しい対照をなしていた。一人は貧しい時代に神を奪回せんとして限界をふみこえ、仮象を押しつけて全体性を得んとして権力を持ってしまふ。他は悲しげで、歴史の担い手で、忍耐と懷疑、力と無力の両方をそなえて受容的だった。前者は火山のようで、英雄、予言者、神託者、立法者であり、後者は自然な展開を好み、宗教的、歴史的、予感的だった。ボルヒェルトはホーフマンスタールが下方に形成したものを、ゲオルゲが上にくりひろげたといっている。とにかく二人の性格の差をあらゆる研究書が口を揃えて述べている。ペーリンゲルものべている——「ゲオルゲは悲劇的で、強力、攻撃的、無制約で常により高いものを求め、真執、確実、率直であり、明析、活動的、統一的であり、小教の人と結んで心から交わり、性格と境遇をマスターし、ヘラスと未来のドイツに対する信仰に燃え、予言者の目で隣人と祖国の運命を予言し、神曲の情熱的な言葉で

手紙を書き、立法者の重厚な書体でローマ字を用い、粗い用紙に書いた。ホーフマンスタールはヒューマニスティックで感じ易く、防禦的で、制限され易く、生活の追究にはげみ、うつろいやすく、喜劇的、遊動的、絵画的でヴェールをかぶり、物をよく見て距離をおき、寛大で多様性を愛し、雑踏の中をさ迷ってすべてに結ばれているのを感じ、社会的環境に育って大きなことすらなおざりにしやすく、不健康に悩まされ、気持よい天候と風景を要し、西欧世界に愛著を持つウィーン人で、その明るい目は個々のものを通して成長と枯死をみる懐疑を宿していた。彼は世俗的書体で、フラクツールで、美しい大きな紋つき紙の上に書いた。」こうして人はどこまでも違った二人の性格などをいつまでもあげて、この二人の違いに驚嘆する。しかしそれでも秘密は解けないのだ。われわれは交りによって互いにどんなに違った人間でも喜びを得ることができる。和し難くして和さねばならぬのが世界だからだ。この二人の詩人は一見和さなかったようにみえるが、よく見ると決裂後、やはり和しているのではなからうか。

この点にふれているのはジャイメやクルト・ジンガーだ。橋もなく終わったようにみえるが、それ以後は非対話的な、精神内の最高の対話があって、それが何年も、死ぬまでも続いているのだ。手紙や会合だけで交りが終わったというのは、余りにも具体的なものに捉えられている。なるほどゲオルゲクライスのヘリングラートは、「オペラの台本作者がなお詩人と相かかわるなどという考えは、ドイツ詩のためにもホーフマンスタールのためにも、われわれのあえてとろうとせぬ所である。」と昂然といった(川村二郎：詩人と劇場)。けれどもグンドルフやウォルターズやヘリングラートが何といおうが、ゲオルゲは沈黙している。その沈黙を読みとるのにわれわれは、ゲオルゲの作品をもってすべきであって、弟子の言をもってすべきではない。ゲオルゲの作品には急に、時局や国家や演劇やリートに関するものが多くなっている。ダンテやシェイクスピアへの関心が強まっている。それがホーフマンスタールとどんなに違った形であっても、この公共性や伝統性はホーフマンスタールと何らかのつながりがないであろうか。ボルヒェルトはひどくゲオルゲクライスを冷静に見、かなり手厳しい批評をしている。けれどもホーフマンスタールはやはり沈黙しているではないか。なるほどホーフマンスタールは古代ギリシャ劇の模倣を始め、シュトラウスのオペラの台本を作った。文化の伝統と公共性に溺れたように見えはするが、しかしジャイメがいうように、「塔」という劇は再びゲオルゲの「新しい国」とひどく接近し、人間と国民の教育に向おうとしている。1927年の講演、「国民の精神空間としての文学」においては、二人の詩人の運命が追求されていった結果、ドイツとオーストリーという国民論にまで拡がっていったと考えられないだろうか。二人が違っていること位を見出すには、ホーフマンスタールの才能を持ってする必要はない。彼の才能からわれわれは変化と克服と追究しか期待してはならない。事実、ホーフマンスタールはこういった——「若い時の記憶には苦しい錯綜したものがあって、そ

れを解くの的一生かかるのだ。私は私の若い時代と和解して死にたいものだ。」彼は「救われたヴェネチエ」を送って、「この強い人と弱い人の姿は二人の人間の比喩のようにみられるが、人生において波のように寄せ返す多くのことがここに含まれている。」と書き、かえってゲオルゲの不快感を招いたのであるが、それ以後何年もかかってホーフマンスタールは、そのころの缺陷を克服し、遂に晩年の和解に近づいたのである。そのころの缺陷、それは二人の友情の基礎が未だ不充分で、「救われたヴェネチア」のような芸術的手段で応急措置をとってもどうしようもないということだった。ジンガーはそのような認識の過程として、「アンドレアス」を分析している。「非精神的な人間がゲオルゲを認めた時しばしば気付くのと同様に、アンドレアスはマルテールを認めた時、ひどく厭な人だと思った。そのマルテールがアンドレアスにとって今は最も美しいものになり、完全な愛、完全な形式になっている。アンドレアスはマルテールの前に気が抜けたように立っている。自分が無骨な者に思われてくる。だが彼の五体はこの高貴な、決然とした人の姿を心にまできざみつけ、焰また焰となってゆれ動いているのであった。」このように説明して、ジンガーは焰の人ゲオルゲが水の人ホーフマンスタールの作品に与えた影響を解いている。そして彼は最後に、「美が成り立つ極めて困難な事情を神が意識して、或いは神が美をうらやんで、この二人の悲劇的に愛しあう詩人を水と火の双方に隔てたのである。」と嘆息している。確かに二人の詩人が、二つの美が成り立つためには、「火と水の永遠の争いと愛」ともいうべき、悲しい行きごとがおこらねばならなかったのであろう。ジンガーは知っている：空と土は互に友になって助けあえるかもしれない。土壌は空気に緩められ、空気は土壌に吸収される。造形的で大地のようなゲーテと、思索的で空のようなシラーは一体になることができた。しかし水と火はそうではなかった。水はいよいよ拡がり、火はいよいよ燃えたが、水が火を呑むことも、火が水を乾かすこともできず、いつまでも一つは燃え、一つは流れているのであった。